



中国公案小説の系譜 (尾声)

竹内 誠

19世紀、アヘン戦争が勃発し、中国はイギリスに大敗し、長らく閉ざしてきた門戸を開かざるをえない状況に追い込まれる。それを機に、西洋よりおびただしい事物がもたらされ、大きな影響をこうむる結果となる。文学もまたその例外ではなかった。

ちょうどその頃、劉鷗(1850?~1910?)という一風変わった人物がいた。あるときは医者、あるときは実業家、あるときは作家といった、いろいろな顔をもち、また漢字の祖先ともいべき甲骨文字発見にも大いにあずかる。彼の書いた小説《老残遊記》(1896年刊)は、作者本人とおぼしき老残という主人公が中国各地で、病人を治しながら遊歴し、各地方の役人の横暴さを暴いてゆくというストーリーになっていて、清朝末期の諷刺小説の代表作とされる。なかでも興味深いのは、老残が薬品の知識を活用し、探偵役を演じる箇所のあることだ。齊河県にある買家で、月餅を食べた13名が毒殺されるという事件が起る。地元の役人は、真犯人とは違う者を捕らえる。そして老残は、本人の意志に反して、真相究明に駆り出されてしまう。

白公はいった。「まだ生きている者は当然救わねばなりません、死んでしまった者の恨みは晴らしてやらなくてもいいのですか。この怪事件は、尋常なひとに解決できるはずありません。どうしても、福爾摩斯のようなあなたにお頼みしなければならぬのです。」老残は笑って答えた。「私にはそのような能力などありませんよ。」 同書第18回

下線を引いた部分は、誰もが知っている探偵の名前なのだが、おわかりであろうか。漢字で書いてあるので、恐らくピンとはこないかもしれない。コナン・ドイル創案にかかるシャーロック・ホームズである。シャーロック・ホームズ探偵譚は、当時すでに中国で翻訳し出版されていたのである。従来、こうしたジャンルでは、包拯の独壇場であったが、西

洋の波に押され、じょじょに影が薄くなってゆく。以後、包拯は小説の世界での出番を失ってしまう。しかし、最初にも書いたとおり、芝居、語り物、テレビドラマといった分野において、現在なお根強い人気を保っている。公案小説は、中華民国以降、絶えて書かれることがなくなった。



ところが、のちに公案小説の体裁を做った推理小説が出現する。作者は、意外や、中国人ではなく、ファン・フリーック(1910~1967)というオランダ人であった。大学で、政治、法学、中国学、日本学を学び、習得した外国語は日本語、中国語を含め、実に十数ヶ国語に及ぶ。また外交官として在日の経験を持つ。とりわけ中国の文化に該博な知識をもち、漢詩を詠み、書画を嗜み、琴を演奏したといわれる。数多くの著作が残されているが、なかでも《The Chinese Bell Murders》(1950年脱稿)をはじめとする「Judge Dee (ディー判事)」シリーズは、かつての公案小説を手本とした推理小説で、彼の本領が遺憾なく発揮されているといえよう。「ディー」とカタカナで書いたが、中国語の漢字音から来ており、漢字で表わすと、「狄」となる。フルネームは狄仁傑、唐代に実在した人物で、かの悪名高き則天武后に仕えた。性、剛直かつ清廉、林語堂から「当代随一の偉才」と激賞されている。狄仁傑を主人公とする《狄公案》という公案小説が清朝に出版されており、フリーックは、その英訳を手がけている。《狄公案》を含めた中国の通俗小説を巧みに翻案して、中国に対する深い学殖を交え、名探偵ディー判事をつくりあげたのである。

現在、公案小説の呼び名は、中国で「偵探小説」もしくは「推理小説」に取って代わられている。最近、中国の書店では、国産のものよりか、アガサ・クリスティや森村誠一といった外国人作家の翻訳が、まだまだ多いように見受けられる。中国において包拯に匹敵する名探偵が登場するのは、果たしていつのことであろうか。

(了)

たけのうち まこと (助教授・中国文学)